

# 物理主義と形而上学的基礎性

北村 直彰

慶應義塾大学（日本学術振興会特別研究員 DC）

本発表は、物理主義の定式化をめぐる問題、とくに、「物理的なものの基礎性をどのように特徴づければよいか」という問題を論じる。

物理主義の基本的な主張は、ごくおおまかに述べれば、「すべては物理的である」「いかなるものも物理的なもの以上のものではない」というものである。この主張を精確に定式化するためには、「物理的である」とはどういうことか、および、「…以上のものではない (be nothing over and above...)」とはどういうことかを規定しなければならない。本発表が焦点をあてるのは後者である。

初期の物理主義者は、「…以上のものではない」ということをタイプ間の同一性として規定した。すなわち、「いかなる非物理的なもの（とりわけ、心的なもの）のタイプも、なんらかの物理的なもののタイプと同一である」という主張として物理主義を定式化した。このような形で定式化された物理主義を擁護することの困難が明らかになった後に注目を集めたのは、物理的なものを形而上学的に特権化しつつも、非物理的なものと物理的なものとの間のタイプ同一性を斥ける「非還元的」な物理主義である。そうした物理主義を定式化する手法のなかでもっともポピュラーなのは、スーパーヴィーニエンス概念に基づくものである。この概念に基づいて定式化された物理主義は、おおまかに述べれば、「物理的なもののあり方が非物理的なもののあり方を決定する」と主張する。スーパーヴィーニエンス概念に基づいた物理主義の定式化にはさまざまなヴァージョンがあるが、それらに共通する問題点は、「物理的なものの基礎性と非物理的なものの依存性を十分に特徴づけることができない」というものである。この問題点は、スーパーヴィーニエンス概念があくまでも様相的な相関関係の特徴づけるにすぎないということ、またそれゆえ、この概念に基づいて定式化される立場がある種の心身二元論的立場と両立するということによって示されている。

こうした問題点を踏まえて提案された定式化のうちのひとつに、「実現 (realization)」概念に基づく定式化がある。本発表は、そのなかでもとくに A. Melnyk によって詳細に練り上げられた定式化を取り上げ、それが物理主義の定式化として十分なものであるかを検討する。この定式化の最大の特徴は、スーパーヴィーニエンス概念に基づく定式化が捉え損ねる「基礎性／依存性」を、形而上学的に特別な意味での「非因果的な説明」に訴えることによって特徴づけようとする点である。本発表の第一の目的は、この試みが成功していないことを示すことであるが、第二の目的は、物理主義の定式化にとって重要な示唆をこの試みから取り出すことである。とりわけ、形而上学的な「基礎性／依存性」を直接的に特徴づけるために「基礎づけ (grounding)」という概念に訴える近年のアプローチに対して、実現概念に基づく定式化の検討から有益な示唆があたえられることを示す。